

五才児の一年間

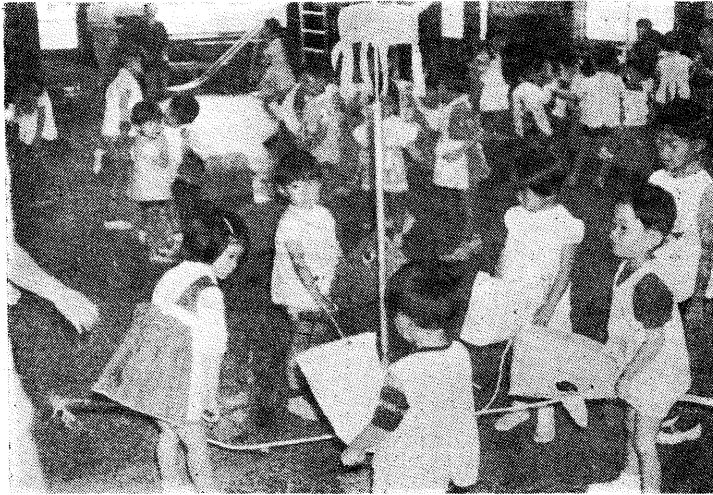
守 永 英 子

最年長の組といつても、四月頃の日記を開いてみると、「こんなだったのかしら」と思ふような記録が残っている。四月十五日、身体測定……M夫がひとりて衣服をぬぎ着しようとする気持をみせてきた。四月二十日、友だちとの遊びにあまり積極的でなかったH夫が、他の六人の男児に加わつて元気に大きな砂山を作つたり、トンネルを掘つたりした。このような小さなことがらがその頃の私の毎日の喜びだつたに違いない。

これらの子どもたちに、このような人になつてほしい、このようなことを身につけてもらいたいといふねがい（目的、或いは目標ともいえる）はいろいろあつた。しかし、それらの中で何か一つ二つあげるとすれば、自主および自律の精神と、協同の精神の芽ばえをつちかつておきたいということかもしれない。

四月の末、最年長組になつて初めての共同製作として、「鯉のぼり」をとりあげてみた。共同製作といつても、この時期ではごく淡いもので、初めから子どもたちがその意識で計画的にすることはできない。先ず、昨春秋、運動会の絵を二人ずつでかいた経験を、一歩進めたような形で行なうことにした。ちょうど自由遊びの時にS夫が鯉のぼりを作つたのを機会に、「もっと大きい鯉を作らないか？」「紙が大きいから、お友だちといっしょに作つたらどうかしら」といふような誘導をした。先ず、K夫、S夫、Y夫がいっしょにひ鯉をつくり、そのうちS夫がまた吹流しを作り始めた。この三人と親しいM夫が「僕もする」と加わつたので「今、お母さん鯉ができたけど、あと何を作るといいかしら？」と言つと、M夫はお庭の鯉のぼりをみてきて「お

父さん鯉をつくる」といふ。そばでよくお友だちの活動をみているT子がM夫に「いっしょに作ろう」と申し出て、いつもあまり接觸のないM夫とT子が、ま鯉をつくつた。続いて、いつもあまり積極的でないI夫とO夫がいっしょに参加してきて「それじゃぼくたちは、赤ちゃんの鯉作ろう」といふことになり、ここで最初の一グループが自然にでき上つた。それに刺激されて次々とグループができてきて、結局、全部で六グループに分れ、或るグループは四人、或るグループは六人あるいは七人になつた。内容的にみれば、あるグループは、ま鯉、ひ鯉、子どもの鯉、吹流しとにぎやかにつけ、あるグループは子ども鯉がなかったり、吹流しが二つできたりして、それぞれ、各グループの力に応じたものを作つた。個人別にみれば、一人で一つ作つた人、二人で一つ作つた人、またその上にもう一つ作つた人、一人でそれぞれ違う相手と二種類作つた人、まだ自分で作るといふより、方々に顔を出して「手伝つてあげたの」と得意になる人、積極的になく受身で参加した（教人）などその参加の仕方はいろいろであつた。しかし、各グループの作品を丈夫な



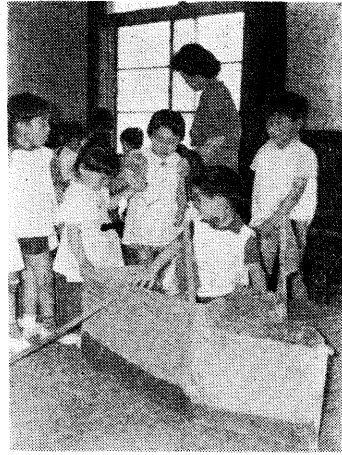
竹につけて保育室に飾ってあげ、また各グループで鯉のぼりをもって写真を写したときにも、みんな喜び共同製作の楽しさがいくらかでも感じられたようであった。しかし「僕た

ちの鯉のぼり」というよりは、やはり「これが僕の鯉」という気持ちの方が全体には強いようであった。

当園では毎年六月に研究会を行なうので、五月下旬より、遊園地あそびを計画した。先ず、子どもたちが遊園地というものにとどの程度の関心と知識を持っているかを知りたいと思い、自由に遊んでいる時、二、三人の子どもと絵本の遊園地の絵をきっかけに話し合ってみた。その囲りに集ってきた子どもたちのたいがい遊園地といった経験があり、楽しかったことなど話しがはずんだ。いつもひとりで工夫していろいろなものを作るS夫が、やがてシーソーを作ってみせにきたので、もぞう紙の上に小さな遊園地を作ってみた。約三分の一が参加し、シーソー、ぶらんこ、鉄棒、ジェットコースター、すべり台、ひこうき、池とボート、池と魚、橋、切符売場などができた。四日後、遊園地あそび”についての話し合いをした。“鯉のぼり”の時は、子ども

たちの活動の結果が自然に共同製作としてまとまるようにことを運んだが、今度の活動では、子どもたちが計画をたてることに参加するようにしむけ、次の四つの点について話し合った。一、遊園地の遊具、施設について知っているものをあげてみる。二、あげられたもののうち、作りたいもの、作れそうなものを選ぶ。三、自分は何を分担するかを各自がきめる。四、各グループでどうやって作るかを相談する。このうち一から三までは全員で話し合い、四、については、情況によって私も相談に加わった。結局、汽車、自動車、飛行機、ボート、ジェットコースター、メリーゴーランド、釣堀、すべり台、ベンチ、馬、食堂、劇場などがあげられた。乗物の材料はダンボールの大きな箱が主であったが、一番チームワークのよかったのはボートの組で、三人(男)で相談して「先生、紙ちようだい」「先の方を紙でこういうふうにするの」とどがらせるつもりらしい。そこでボール紙をあげると「ここをこうするから三枚ちようだい」という。ボール紙を折って、ダンボールの箱にあてている人、セロテープでそこをはる人など、その協力ぶりには驚かされた。

ゆうえん地あそび（ボート）



三人でボートを二そう作ったのは二日がかりの仕事だったが、私が手をかしたのは、オールの棒をちょうどよい長さに切ることで、それを通す穴を切り抜くことだけであった。ジェットコースターなども、どうやって作るつもりかしらと思っていたところ、自分たち（二人）のプランができていて、材料をそろえてあげるだけででき上った。劇場のグループは十三人なので自分たちだけの相談は無理らしく、「紙芝居がいい」「ペープサートがいい」「小人と靴屋の話にしよう」「兎の遠足というお話をつくらう」など、いろいろな意見がでてまもらないので、私も意見を出

し、結局、王さまがさわる何でもパツと金になる（ペープサートの裏を金紙ではっておく）ところがおもしろいと採用されて金の好きな王様の話に決った。ペープサートのやり方も、人形を動かしながら対話をする普通のやり方を考えていたところ、自分たちで知っている筋に従って自由に練習しているうちに、自然に話をする人と、人形を動かす人とに分れ、その方がやりいと言っているので、そうすることにした。子どもたちの考えで押し進められるところはできるだけそれに従い、行きつまるときは私もいっしょになって考えて計画を進めた。この活動の中で、「メリゴランドの馬の頭は紙袋で作ったら？」「釣ったお魚を入れるバケツもいるね」「ジェットコースターのつかまるところ作るから、この位の長さに棒を切つてよ」など、子どもたちは自分の頭で考え、意見を言うようになってきた。遊び方を相談した時も、「遊具の係は組の当番がなるのいい」「作った人がその遊具の係になるのがいい」と意見が分れ、十一対二十三で後の意見に従うことにした。丁夫の意見で、係は二人が適当ときまり、遊具を作った各グループか

らジャンケンで二人ずつ決めた。研究会には組の子どもだけで遊園地を開いたが、六月十四日には、遊き室で遊園地を開き、他の組の子どもたちを全部招待して、大にぎわいであった。遊具の係以外の、組の全員がお客さまの案内係となって小さい人達を世話し、年少組の子どもたちは「後樂園のようだ」と喜んだ。自分の頭でいろいろと考えて意見を言い、計画に参加すること、工夫してものを作ることを、協力して作ることを、自分たちで遊ぶ方をきめて、そのきまりに従って遊ぶこと、小さい人たちをやさしく世話することなど、この活動の中で得たものは大きいように思う。しかし中には、「ひとり、自動車をつくる」と主張して共同製作を拒んだもの、気持はじゅうぶんでも三人足並がそろわず仕事はかなければならない、自分の分担したものを作らなければならぬという気持が弱いものなどいろいろあったが、それでも鯉のぼりの共同製作の時より一段と進歩が感じられた。

この活動の中でも、子どもたちの考えを聞き、それを尊重することは私の心したことであったが、実際、子どもたちは、することを一方的に指示されるより、自分の意見を聞か

れとりあげてもらふことを喜び、活動が自主的、積極的になるようであった。

ちょうど一学期も半のある日こんなことがあった。お弁当によく菓子パンと牛乳を買って持ってくるN子が、朝、「今日はお店がお休みで、パンが買えなかったの」と告げた。私は、N子のつきそいの人が家に戻ってお弁当をとどけてくると思ったが、「今日はお弁当がないからたべない」とN子の様子がおかしい。そこで、N子の家に電話をすると「いつも家からのお弁当をいやり、パンを買う、牛乳を買うと勝手に言い、今朝もそれを出かけましたが、こらしめにお弁当を届けてまいと思ってきました」との返事。とにかくお弁当を届けていただくようお願いして、N子に何と話そうかしらと考えた。お昼になって、家から届いたお弁当をN子に渡しながら、何気なく「よかったわね。お店のパンよりお家のお弁当の方がいろいろ入っている」と言ってみたが、N子は沈黙。そこで「毎日お店のパンばかりより、いろいろなものを入れて下さったお弁当の方がN子ちゃん大きくなれるんじゃないかしら。先生はそう思うけどN子ちゃんどう思う?」「……」「やっぱ

りそう思う?」N子の表情がやっとほぐれて、にこっとうなづいた。「それじゃ先生と同じ考えね」と私はホッとした。あとで聞くところによれば、N子は「どう思う?」がたいへん気に入って、家でも、「N子はこう思うけどママどう思う?」を連発。家中ではやってしまったそうだ。それからN子のお弁当は、毎日、母親の手づくりになった。二学期はいろいろと行事が多い。運動会、遠足、お芋ほり、子ども動物園への園外保育などで忙しい。しかしそれらと同時に言語の面に力を注いだ。もちろん、今までもしてきたことであるが、組全体で先生の話聞く態度や、理解、自分のしたこと、してほしいこと、疑問などがあることを身につけておきたいと思った。お話をきいたり、テレビをみたりする機会を多くし、夏休みや、遠足の経験などを話したり、テープに吹きこんでそれを聞いて楽しんだりした。また、知っているお話や作っ

たお話を、ペーパーサートや紙芝居にして、お友だちにみせ合ったりした。これらの活動の中で、自分たちでグループを作ったり、その



リレー

中で役割を受け持ったりする相談は、子どもなりにかなり上手にできるようになったし、自発的に参加しようとする態度もできてきた。みんなにきこえるような声ではっきり話すことは、かなりむづかしいことであったが、二学期の末には、お友だちのベープサートや紙芝居に大分興味を示して、よく聞くようになってきたので、見せる方の拙さもそれで補うことができた。

三学期のひなまつりには、毎年最年長組がいろいろ計画することになっているが、子どもたちとの相談の結果、私の組では劇とベープサートをすることにきめた。とりあげるお話も、子どもたちからもいろいろと案が出、私も案を出した。もし大ぜいの子どもが賛成する案があれば、自分の案を引っ込めて、ねりなおすつもりであったが、子どもたちの大部分が賛成し、多数決で採用してくれた。子どもたちの希望によって、劇とベープサートの二組に分れ、役割も、希望の多いものは子ども意見に従って、ジャンケンによってきめた。今年度の初めの頃はなかなか口をきかなかったM子が、一人で話さなければならぬ役を自分で選んだことは、成長ぶりを感

じて嬉しかった。子どもたちの意見で、ベープサートは「ほん太の茶釜」とつけ、劇は、出てくる女の子の名前を「ちこちゃん」としたいというので「ちこちゃんのおだんご」とつけた。(内容は「ぶんぶく茶釜」と「おだんごまで」を脚色したものである。)自分の役割についての意識は、かなりはっきり持っており、殆どの子どもが自分のお面やベープサートは、大きさやベープサートの心棒のつけ方などを注意するだけでさっさと作った。練習の時もみんな大体の筋をよく理解していて、時々助言したり、言いそびれてしまう子どもに言う時を作ってあげる位で進んだ。「子狸が遊びにいく時、お父さんやお母さんは何いうかしら」「ほん太さんがや」と帰ってきた時、みんな心



ひなまつり

ベープサート (ほん太の茶釜)



ひなまつり

劇(ちこちゃんのおだんこ)

配して待っていたんでしょ。何か言ってあげましょよよ。」きまったらせりふなどはない。子どもたちはその場面々々で、自分のことばで考えて言う。二、三度繰り返し返すうちに自分のことばもきまってくるようである。次第にお友だちの役も分ってきて、「ほら、Hちゃんの番よ」とうっかり忘れた子どももお互に注意する。劇の練習の時はベープサートのグループが観客であり批評家で、「もっと大きな声で」「鬼がもっと元気な方がいいわ」「お地ぞうさまふざけるとおかしいよ」「そこ、いっしょにおどった方がいいと思う」などなかなか意見がある。誰かお休みがあると、「私、やってあげる」と、お友だちの役までよく心得ていて、代役を立派にやっけてのける。「ここで鬼がうたをうた

うといい」「鬼の歌、いいがないのよ」「じゃあ作れば……」子どもたちはためらいもなく作ってくれた。「鬼のことも遊びます。

楽隊をしてあそびます。歌ったり、踊ったり、たいこを叩いて遊びます。鬼の子たちは嬉しそう。「誰か歌って下さる?」「それくらい先生がしてよ」とY夫。「そうね」と思わず笑ってしまったのも、ついこの間のことである。卒業の頃には、先生と子どもというより、お友だちのような親しい気持だった。私も、迷う時、困った時には、よく子どもたちと相談し、いっしょに考えたものだった。

「ひなまつり、お上手にできるかしらね。」
「先生大丈夫よ。うまくいくわよ。」
「ずい分と手にかかる子どももいたし、いろいろなことがあったが、別れてみると本当に頼りになるよい子どもたちだったとしみじみ思う。自分の頭でものを考え、自主的に活動し、人と協力でき、負けずに困難をのり越えていく子ども、そんな子どもになってほしいと心から願う。」

*

*

*